

国立大学改革強化推進補助金(国立大学経営改革促進事業)  
事業期間を通じた評価

国立大学法人筑波大学 学長 殿

国立大学改革強化推進補助金に関する検討会

国立大学改革強化推進補助金(国立大学経営改革促進事業)の事業期間を通じた評価について、検討会における審査の結果を踏まえ、下記のとおり評価結果をお示しします。  
あわせて、本検討会の所見についても別紙のとおりお示しします。

記

A	当初の構想どおりの取組が行われ成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。
---	--

国立大学改革強化推進補助金(国立大学経営改革促進事業)の  
事業期間を通じた評価

国立大学法人 筑波大学

(検討会の所見)

- 体育と芸術分野をもつ独自性を活かした学際的・国際的活動によって新しい学問分野を切り開くべく、学長のリーダーシップのもとで、様々な独創的な制度を導入し、しっかりした目標を定めて、具体的な活動を展開し、際立った成果を挙げている。KPI に関して、Top10 論文割合や国際共著論文など達成できていない指標もあるが、若手教員の採用をはじめ多くの指標を達成している。ファンドレージングについても軌道に乗せている。IR に関する取り組みも堅実である。
- コロナ感染拡大の影響を受けて、達成できない KPI もあるが戦略的人的資源配分による機能強化の進展は注目すべき点である。改革強化には司令塔となる学長直轄の独立部局の強化は必然である。引き続き今後に期待する。
- 筑波大学が近年グローバル視点で世界を目指す経営戦略を追求していることは承知している。課題は、グローバルに成長する大学、知識基盤型社会における先導者として、これからますます求められるスタートアップへの支援ではなかろうか。
- 研究拠点形成の推進、経営基盤強化のための体制整備、アスレチックデパートメントの設置など、これまでの課題克服に向けた取り組みが学長の強いリーダーシップによって推進されている。  
指定国立大学法人に指定されたことを受け、その構想を実現するための大学経営推進局の設置が予定されているが、構成員のモチベーションを高く維持するためのガバナンスにも期待したい。
- 教・教分離体制を基盤とする研究推進が進められていると評価できるが、KPI の達成状況はまちまちである。調書では、目標未達の KPI についてコロナ禍を理由としているもの(経常収益に対する寄付金収益の割合や、国際共著論文比率)がみられるが、その認識が妥当か疑問が残る。他大学では、同じコロナ禍にありながら、取り組みを進めるうえで様々な工夫をし、同様の KPI の目標を達成している例がみられる。目標未達の本来の理由をきちんと分析して受け止めることができ初めて、次なる改革の進展や業績の向上につなげることができるのではないか。
- KPI を達成していない項目が半数近く見られる。全学的な意志の統一が十分になされているのであろうか。筑波大学の實力からみて、Top10%の最終目標値 12%が「意欲的な目標」とは到底言い得ない。さらに上を目指すことを期待する。

次項あり

- 「体育、芸術分野を持つ総合大学の独自性」が経営改革構想の中で、どのように進化しているのか不明。